

ガーナにおける洋服の流通と伝統的衣装文化の共存  
-アフリカ布の使用に着目した衣服選択を通して-

谷川真由

要旨

多様な民族、宗教などが混在するアフリカでは様々な染織が各地域に存在する。その一つである、仏語圏の西・中部アフリカでパーニュとも呼ばれるアフリカ布は、17世紀のインド更紗を起源とし、オランダによって西アフリカのゴールドコースト（現在のガーナ）に届けられた。多くの場合一枚布のまま販売され、布を購入し、仕立屋で好みのデザインや工夫を凝らした服に仕立ててもらふ。アフリカ布が持つこのオリジナリティの反対にあるのが、既成服である。昨今は衣服の大量生産・大量廃棄が問題視され、その廃棄方法の一つに途上国への輸出がある。古着として輸出された先の一つにガーナがあり、現在はサブサハラ・アフリカにおいて古着輸入額が第1位となっている。本稿ではアフリカ布の使用に着目した衣服選択に焦点を当てながら、ガーナにおける洋服の流通と伝統的衣装文化の共存について明らかにすることを目的とする。

調査を行ったガーナの首都アクラの中心市にあるマコラマーケットでは、比較的低価格帯のブランドやアフリカ布の販売店が多くあり、仕立屋が街の中心地に限らず郊外にもあるものの、アフリカ布の価格は大きく値上がりしており、一般の消費者がアフリカ布を購入し身に着けることは経済的に容易ではないと考えられる。また、聞き取りによるとアフリカ布を用いた服の着用は減ったという声があるものの、現在でも特別な行事はもちろんのこと、日常においても着用されていることが分かった。特に毎週日曜日に行われる教会での礼拝時にはアフリカ布を身に着けている割合が高くなることが明らかになった。さらには、アフリカ布の「良質さ」は、美しさや快適さ、色落ちしないこと、柔らかさが基準となり、ブランドがその判断材料になることもある。ガーナ産の布は「良質な」布だと評価されているが、生産地よりも品質が重要視され、中国製品やコピー品でも「良質」であれば購入されると推測される。一方、「良質」とされた布で作られた服はサイズ変更に対応できるように仕立てられ、余り布は他の用途に再利用され、長期的な使用が実践されている。

また、ガーナの人々は服を手放す際に廃棄することなく、人に譲渡することが明らかになり、主に先進国における「服を手放す」ことの容易さとガーナの人々の「服を捨てない」という廃棄に対する価値観の違いが鮮明に浮き彫りになった。その違いは、ガーナの人々がデザイン性や清潔さが失われたときではなく、機能性が失われたときに物を最終的に廃棄しているために生まれると考えられる。先進国の人々の服の廃棄によりもたらされた大量の古着や既製服の流通がますます活発になる一方で、ガーナにおいてアフリカ布を用いた服を着用する文化は依然として残っており、古着や既製服などの仕立服ではない洋服とアフリカ布を用いた服が双方を排他的なものとしてとらえることなく共存しているためにそれが可能だと考察した。

(1195字)